WEP 俳句通信

ウエッブ俳句通信 VOL.83

特別作品25句●山﨑千枝子「青梅宿」

特集●「70代俳人・作品10句」

大牧聚子(栞)　「土用時化」
大須賀喬子(獅祭)　「精踊る」
大谷てるみ(ランプル)　「大根引」
沖　あき(鷹)　「チューバ」
奥田卓司(たかんな)　「みちのく源風トレイル」
小野　怜(向風)　「小鳥来る」
片山亀夫(白鳥線)　「花オクラ」
樺山　翠(向月)　「鶏冠」
川上良子(未来図)　「水蕎の花」
近藤晩代(馬酔木)　「底の国」
斉田　仁(夷)　「秋景」
酒井裕子(河)　「名残り鯛」
佐藤公子(松の花)　「棚の秋」
佐保田乃布(童子)　「鹿の声」
島村紀子(天頂)　「小春日」
白石多重子(青山)　「月の庭」
鈴木　勉(対岸)　「那須岳」
髙木理子(玉梓)　「眼を閉ぢて」
髙木瓔子(春野)　「風おと」
長坂興佐子(かつしか)　「鳳仙花」
中村洋子(風土)　「秋深む」
浪山克彦(小熊座)　「九孔」
成田清子(門)　「橋に来て」
庭田一美(鈴)　「冬椿」
沼田和子(樹氷)　「鮭のぼる」
根橋宏次(やぶれ傘)　「金柑」
比田誠子(白鳥)　「古備秋色」
平松義之(浪矢)　「冬桜」
松田純宋(山茶)　「霧の音」
御木正祥(杉)　「木守柿」
山口啓介(野火)　「しぐれ」

【鑑賞会】
波戸岡旭第６句集『惜秋賦』を読む
出席者／遠藤若狭男・吉岡桂六・波戸岡旭

【特別寄稿30句】
松岡隆子「母許」

【精鋭作家競詠20句】
日原　傳「カナリア色」
辻内京子「鏡の間」
土肥あき子「寒波来る」

●作品●
田中水桜・猪俣千代子・下鉢清子・深坂リエ・金久美智子・加藤耕子・
船越淑子・伊達甲玄・永方裕子・山崎房子・木田千女・森田公司・加藤瑠璃子・
檜　紀代・髙橋道子・辻恵美子・広瀬恵美子・角谷昌子・髙橋宏子・石川敬子・
細見遊子・荒井千佐代・前田攝子・中戸川由実ほか

●好評エッセイ●
新連載・岡本眸の俳句「薔薇に風―『朝』」小川美知子
先人に学ぶ俳句「飯田蛇笏(三)」岸本尚毅
俳句とともに「飯田龍太の風景―― 文学碑「水澄みて」」井上康明
川崎展宏の文業「「私の花鳥諷詠」(『俳句初心』)」須原和男
虚子の肖像「続・虚子俳話」坊城俊樹
森澄雄の背なか「雪樺」千田佳代
虚子散文の世界へ「小説家として名乗り」本井　英
時空の座・拾遺「私の『広場の孤独』」西池冬扇
地味で変な虚子句　五句集を読む「静かな視線」阪西敦子　ほか

浅間山空の左手に眠りけり

石田波郷

顕彰碑

JR吾妻線「万座・鹿沢口」の駅前、R144号線沿いの一角に小さな植込みがある。今は冬木となっているその根方に「中居重兵衛之碑」が立つ。現在嬬恋村の一部であるこのあたり、昔は中居村といい、幕末にこの近くで生れた中居重兵衛の顕彰碑である。

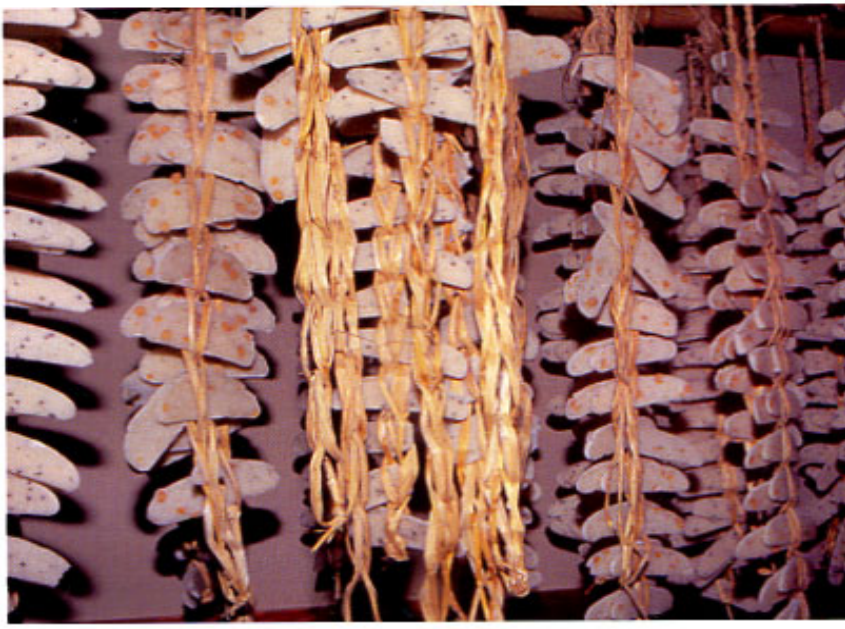
名主の息子であった彼は20歳で江戸へ、その後横浜に移ってさまざまな事業にたずさわり、特に生糸の貿易で大成功して財をなした。上質で定評のある上州の生糸も扱い、それが今年世界文化遺産に登録された官営富岡製糸場へとつながるのである。その一方、重兵衛は水戸の浪士達と親交があり、桜田門外の変として知られる井伊直弼暗殺に関与したとされる。

ここからR144号を少し西へ進むと、うっすらと煙をたなびかせている浅間山がのぞめる。

絵・文　松本善一

雲の旅⑥

名村早智子



氷餅（こおりもち）

氷餅初更の水を出でにけり　石井露月

日輪に乎し苞（つと）の氷餅　木村無城

冬の川

京都の市街地を北から南へ貫き流れる鴨川。大らかな流れとともに両岸の自然の豊かさが京都の街全体の景観に大きな役割を果たしている。桜のころは言うまでもなく、流れに映える紅葉の美しさは、どこを歩いても感嘆の声を上げずにはいられない。

四条大橋のたもとに顔見世で知られる南座がある。十一月の末には、恒例となったまねきが掲げられ、勘亭流で書かれた役者の名を見上げる人も多い。そしてそのころになると鴨川を飛び交うゆりかもめの姿が見られるようになる。朝早くに来て一日を鴨川で過ごし、夕方四時前には、あちこちに散らばっていたものが一羽残らず集結し気流に乗って、鳥柱を立て、琵琶湖の塒へと帰ってゆく。春まで毎日それを繰り返すのだ。上流に目を凝らせば、北山にはすでに雪を冠った嶺が見える。

遠雪嶺とゆりかもめ、鴨川あればこその悲かれてやまない京都の冬景色である。

流れゐることも忘れて冬の川　早智子

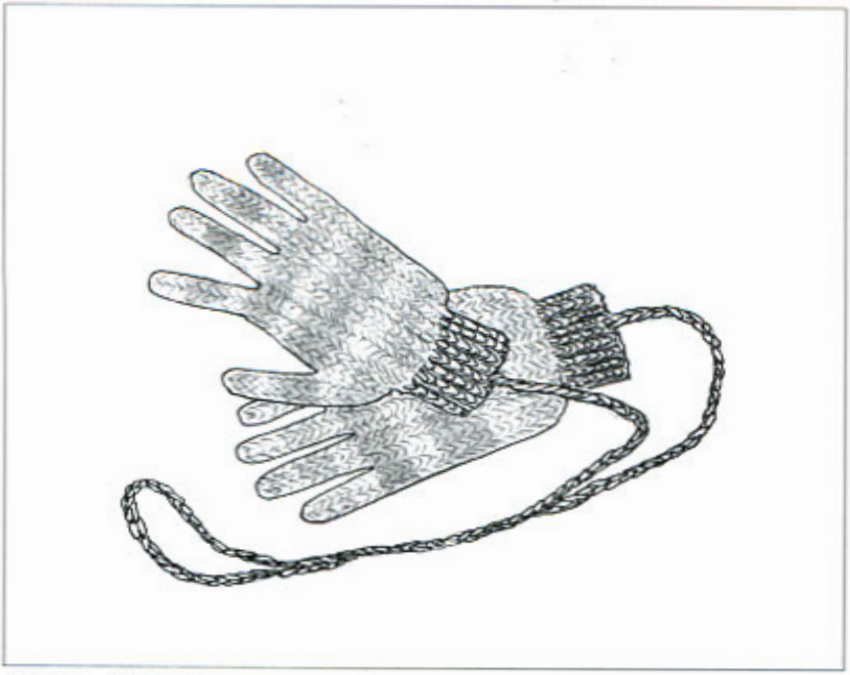


イラスト　田中丸菜子

手袋（てぶくろ）

手袋をはめ終りたる指動く　高浜虚子

手袋の十本の指を深く組めり　山口誓子

手袋の手を振る軽き別れあり　池内友次郎

いまはいざ知らず、昔、わたしの母などは冬になると手に皸をつくってよく嘆いていたものだ。水が冷たかったせいなのかどうか。わたしなんかも指に皸ができ、ひりひり痛んだことがある。それで、冬になると毛糸の手袋を母が編んでくれた。その手袋は、失くすといけないといって、両方を毛糸の紐でつないでいた。

その手袋をはめてチャンバラごっこをしたりしたが、そうすると、指の先に穴があいてしまい、よく繕ってもらったものだ。

社会に出たころから手袋をすることはすくなくなったが、冬の釣りでは一時期使ったことがある。妙な手袋で、革手袋の指の部分がないのである。練り餌を指で丸めたりするために指は出していなければならないので、指の部分の革は切ってしまってあるのだ。しかし、それでは余り寒さを防げないと知って、すぐにやめてしまった。といって、近ごろはどういうことなのか、皸ができるということはないようだ。

大崎紀夫

特集 70代俳人

先月の特集〈新鋭30人〉では、若い世代の俳句の傾向を探ろうということでしたが、今号は〈70代俳人〉の特集です。俳句人口の多くを占めると思われる70代俳人、句歴も長く、各結社で実力派と目される人たちを、主宰・代表から推薦して頂きました。それぞれの作品から現代の俳句の風景が見られるかもしれない、という企図です。

岡本眸の俳句①

薔薇に風——『朝』

小川美知子

二十数年前、『朝』の誌友になって間もなく、若手の勉強会である「日矢の会」の、第一回の例会に出席した。大勢の中に黙って坐っていると、背後から来た人の弾んだ声。「まあ！太りそうな物ばっかり」と。卓の上には茶菓が用意されていた。その、弟子たちに会うのが本当に楽しいと言外に響く声の明るさは、末弟子の緊張をほぐすのに十分だった。これが、私が師岡本眸に出会った最初だった。

岡本眸の句を読み返すたびにその新しさに驚き、何気ない言葉に吹き込まれた思いの深さに気付く。

初期から現在までの長い俳句の業績について、ささやかな紹介を試みたい。十の句集とその後を順番に取り上げていく。

今回は『朝』を取り上げる。

第一句集『朝』は昭和四十六年七月に刊行され、俳人協会賞を受賞した。昭和三十二年から四十五年まで、作者二十代から四十代にかけての作品四百四句が収録されている。独身時代から結婚、父母との死別、大病という人生の歩みが詠まれ、著者のあとがきに続いて師富安風生の懇切な解説がある。

キャンプ張る男言葉を投げ合ひて

『朝』の冒頭に置かれた句。二十代終わり頃の作品。

まぶしい青春の一句である。一見無造作な口調の中に、若い女性達の溌溂とした声と動きが浮かび上がる。女性だけでキャンプのテントを張っているのだと思う。男手を頼りにしていないから「男言葉」になる。既に女言葉も男言葉も境目がなくなっている現在とは違う「男言葉」が、青い夏の森の中を活発に飛び交っている様が浮かぶ。

この句以前の『朝』に未所収の作品に〈夕立やダンスホールと窓対す〉などがある。この〈夕立や〉について、師富安風生から「ヘンな句だが実感がある」と笑われた、そのことを嬉しく覚えていると、随筆『栞ひも』にある。

カンナの前濡れし水着を提げ通る

海水浴をして来て濡れた水着を携えカンナの前を帰って行く若い女性（作者）。さっきまで濡れていた髪や身体が潮

超結社句会／新12番勝負

前列右から　新海氏、神野氏、菊田氏
後列右から　星野氏、笙鼓氏、藤本氏

ゲスト　菊田一平・神野紗希
　　笙鼓七波・新海あぐり
ホスト　星野高士・藤本美和子

編集長　超結社句会の第25回目です。ゲストは「や」「晨」同人の菊田一平さん、神野紗希さん、「風叙音」主宰の笙鼓七波さん、「未来図」同人の新海あぐりさん。ホストは「玉藻」主宰の星野高士さん、「泉」主宰の藤本美和子さん。遠慮のない意見交換をお願い致します。

高士　点が割れました。3点が5つ。では始めます。

ちりとりをもち箒もち一の酉　（一紗高）

一平　今日が「一の酉」。酉の市といえば熊手ということになります。ちりとり、箒、熊手。掃除道具一式でめでたいなと思いましたね（笑い）。リズムが良かったですね。

紗希　ようするに熊手は売っていて、「ちりとり」と「箒」は掃除をしているということですよね。売られている熊手に対して日常的な「ちりとり」と「箒」というものが出てくるのも、非常に新鮮で、取り合わせという意味でいっても距離が接近してくる面白さというのもあるんだなと。

高士　わたしも頂きました。この句は「一の酉」にいっているわけではなくて、今日は「一の酉」だと思って、「ちりとり」と「箒」を持っている、と思いました。「一の酉」は一